の艱苦にも屈せざる救世的觀念の大勇猛心は死すとも猶止まざる衝天の意氣ありと雖ども、一面に於ては一輪の野菊に對して無常を歎げく纖細(デリケート)の情調あり、剛毅の反面は極めて謙讓なる人格者にして深く自ら責め自ら抑えて許す所無かりし偉大なる聖人なりき、聖人を知らざる淺薄なる人士は得て皮相的見解を下すもの也、

弘安五年十月十三日臨滅度時の鐘の音は韻々として寂莫に響き香煙薫郁たる辰の刻に慈顏笑を含みて法体眠るが如く不滅の靈光衆生の闇を照し、深き涅槃の雲に隱れ給へり、寶算六十一歳、血と涙とによりて色彩られし生涯は清く而して深刻なる感銘を殘せる歴史の一頁なりき、大正の現今天下の民衆は何れも肉餓へ心渴きて靈の麵包と滚々として涸かざる生命の泉を冀望して止まざる也、宗教の改革生活の根本的改造は既に吾人の頭上に接近せり……聖誕茲に七百年大蒙古の襲來無しと雖も思想の變遷惡流の來寇或は排日なんど現代の疾患は吾人等を痛戟して、見ぬ蒙古以上の慘劇を見る噫！是等の疾患を克服し永へに人類の光明たるべき當年の法華經の行者今何處に居る、日蓮聖人を研究し理解する人物は已に聖人を知る者にして現代を超越せる法華經の行者也と謂ふべきなり。

自覺せよ靑年僧侶

戸田峰仙

本年は聖誕七百歳にて吾が門下は津々浦々に至る迄至誠を以つて奉祝す。吾人は日蓮大聖人を口にする時常に自覺の二字を思ひ浮べざるを得ないのである。

「人生字を知るは由來憂患の初め」と云ふは、何を語れるか、所謂自覺の意味に外ならぬと思ふ。世に處して空々寂々たる者は、無事太平あらんも稍々理解力成すれば則ち種々の憂生じ來る。詰り道を學び自覺力の生ずるに從つて色々な煩悶の起るものである。例へば一般に田舍の人は質朴にして別に野心も希望も無き樣に見ゆれ共晨に星を戴き、夕に月を踏みて、終日糞土の間に勞役し、而

も何等の不平なく平和な生涯を送り。都會の人は奢侈なる生活に流れ、巨萬の富を夢みつゝ、劇甚なる競爭場裡に心身を勞し、而も年中生活難に追はれ、甚だしきは其れが爲に生命を棄つるが如き悲慘事もある。

或は學問を以て人生を解結せんと欲し、不可解を絶叫して遂に華嚴の瀧に身を投ずるが如き者さへ少からず。是に於て、田舍生活と都會生活とを對比するに何れが幸福ならんか。

諺に曰ふ「瓦となつて全からんよりは玉となつて碎けん」と一見田舍生活は平和にして呑氣ならんも都會の生活難てふ動物に喰はれんが爲めに、都會生活を營まんとする者、年々增加し來る、之れ所謂瓦の滿足に甘んずるを得ずして玉となつて碎くるを望むの輩なり。所謂尙其の言は自尙的の意味より來らざる可らず。

然るに近來此の自覺と云ふ事を頻りに主張する者あり雖然此の自覺とは如何なる意味ぞ過去より現在、現在より未來益々必要なる事は云ふ迄もなき事なり。又人間の心理狀態として、何人にせよ必ず起るべきもので、智識が進めば進む程、自覺を生ずる者である。此の自覺の境地に立つたと云へる人は必ず理想と抱負とがなければならぬ。若し自覺せりと雖も理想なく抱負なく自ら任ずる所なくんば、決して眞の自覺とは云ふ可らず。自ら任ずる所ありて、理想に向て進む場合果して如何なる經路をたどるかと云ふに、社會の事は容易に意志の命ずる儘にならず、自己の高き理想は社會に認められず、實際には樣々な障碍を生じ、容易に之れが實現を見る能はず。是に於て苟も自覺を有し、理想あり抱負ある人々は、事實上必ず不平が起こる。「物平かならざれば必ず鳴る」で。極く平和で滿足の位置にあれば何等の苦痛も不平も起らざるも、現在の境遇に滿足せず、何等か前途に光明を認め、理想を立て、之れに進まんとするものは、絶へず平かなるを得ずして、常に波瀾を生じ煩悶不平と戰はざる可らず。此の意より云ふ時は不平煩悶は實に人生の美點と云はざるべからず。

古來聖賢偉人と謂はるる人々は皆不平煩悶の人々である。釋尊にせよ、基督にせよ、吾祖大聖人にせよ、何れも現在の自己の境遇に滿足する能はずして、大なる理想抱負を有し、大なる不平を充さんが爲めに、渾身の力を竭し、彼の偉大なる人格を致されたのである。既に理想に不平を伴ふ者せば、大なる理想には大なる不平の生ずるは勿論なり。基督曰く「我は神の子なり」と。併し事實彼は許嫁の夫より排斥された宿なし女の腹より汚き馬小屋の藁の上に產み出された憐れな兒である其れが自ら神の子なりと叫びしは實に自覺の二字によるのである。釋尊は一國の王子として御降誕遊ばさる。通常の人なれば實に滿足す可き境遇なるに、釋尊は物質的慾望の滿足を求めず大なる煩悶を生じ、大なる不平を起し、遂に出家し千難萬苦を敢てして、自ら悟る所あつて「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」亦た「我亦爲世父乃至每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」と。此の大抱負を以て、一切の衆生を救濟せんとせし釋尊の理想抱負は豈に小なりと云ふ可きや。又日蓮大聖人は十有餘歲にして既に自己絕大の天職を自覺し、天下國家否、三千界の絕對有爲の學に志し遂には「我れ日本國の柱とならん、我れ日本國の眼目とならん、我れ日本國の大船とならん等と誓ひし願破る可らず」と。又我國のみならず、世界統一の眞佛敎を開顯し唱導せる「一閻浮提第一の聖人、智人」として任じられし事は撰時鈔、開目鈔等に於て明なり。斯の如き、大理想を以て、亂れに亂れたる、彼の鎌倉時代に處し、天下を救濟せんとの大抱負の下に、生涯を流罪死罪等多數の大難に遭遇せらる。斯の如く大偉人大聖人と云はるゝ人々は、必ず大なる煩悶大なる不平の人々である。併し一般世俗の淺見を以てせば所謂釋迦は一生涯一衣一鉢の乞食、基督は十字架上の罪人、宗祖は五尺に足らざる身一つ置き所なき流浪の人にして成功者とは云ふ可らず。然れど超世間的の靈界より見れば、釋迦は世尊、三界の大導師、基督は自ら神の子なりと任じ。宗祖は一閻浮提第一

の聖人と叫ばれしは、何れも絶大の抱負と確たる根據に立脚し安心立命を如實に行へる大偉人である。然るに現今の社會狀態を達見するに思想界の惑亂物質界の恐怖何等確固の根據もなく堅忍不拔の自覺信念もなし。

吾人は佛教界の一人として國民の無自覺を悲まざるを得ず。第二の國家を荷ひ立つ可き吾々青年僧侶は、須らく自身を知り、自己の人格を尊重し自己の自己に非ずして、國家の一國民であり、社會の一員であり、家族の一人であり、我が一言一行、直に一家族、一社會、一國家に影響を有する、大なる自己なるを自覺せねばならぬ。所謂自己は單なる自己に非ずして、一言一行微細なる行爲も盡く大なりとせば確然たる自覺と、大なる理想抱負とを以て重大なる天職を完うせん事を希望して止まざるなり。終り。

虹影の凝視

岡　觀　修

此の虹影の凝視は大正九年十一月十三日大崎日蓮宗大學中等部主催都下中學校雄辯大會に出演せる原稿である

高山幽邃の間に、湯々たる聲を上げ、瀑々たる音を立てて九天の空より落つる奔瀧の、其の沫から現れた虹影は、人間不斷の、努力の影で有ります。

父秩の連山を背景とせる、代々木ヶ原に鎭座左す、明治大帝の英靈は、我等七千萬同胞の動脈に通ふて、吾人不斷の力となり。建國の大本を物語つて居るので有る。

惟ふに、金錢、名譽地位もて、人間の價値は、評價し得べきものでは、有りません。世界第一のリッチマンで有る、カーネギーも、遂いに彼の生命を、永遠に購求する、黃金は有たなかつたので有る。彼の、慘虐極まれるルイ十四世の不倫の名譽は、遂に我々を指導し感化すべき、滅せざる名